

茨木市立西小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和3年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

（領域ごと）

- | | |
|------------------|-------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | 概ね良好な結果であった |
| ②A話すこと・聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ③B書くこと | 概ね良好な結果であった |
| ④C読むこと | 概ね良好な結果であった |

（問題形式）

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

（無解答率）

概ね良好な結果であった

（その他）

記述式の問題『二 3・二 4』の正答率が全国平均と比較して、数値的には低くはないが、選択式に比べると低い。

分析

①どの問題についても、全国平均を大きく下回ることなく、概ね良好な結果であった。

成果：本校の重点研究教科を国語として二年目であるが、全体的に国語の学習で概ね良好な結果であることから、本校の取り組みの成果が出てきていると考える。

②設問二の3・4の正答率が少し低く、記述式の問題に課題がある傾向がみられる。

課題：目的に応じて、文章と図表を結び付けて必要な情報を見付ける設問『問二 3』や、目的を意識して、中心となる文や語を見つけて要約する設問『問二 4』など、問題文から要旨を読み取り、自分で要約する力に課題がある。また、どちらの設問にも条件に合わせて文章を書くという点が共通しており、文章中の言葉を用いて書くことに苦手意識を感じる児童が多いと考えられる。全国平均でも正解率が低い傾向にあるので、『読む』分野における読み取りや要約の経験を多く積ませていく必要があると考える。

③設問三の3の正答率が少し低く、漢字の書き換え問題の無回答率が少し高い。

課題：漢字は読めているようだが、送り仮名がある漢字の記述の正答率が下がる傾向にある。そのため、既習の漢字を復習したり、漢字を使って文や文章を書く機会を設定したりする必要がある。送り仮名を意識して漢字の学習に取り組むことができるような学習を行う。

④低学年の学習内容を活用した設問一 1の正答率が少し低い。

課題：「はじめ」「中」「おわり」などの文の構成や、主語述語、思考に関わる語句の理解など低学年の学習内容を問われる問題に対して、正答率が少し低い傾向がある。

〇●算数●〇

(領域ごと)

- | | |
|----------|-------------|
| ①A数と計算 | 概ね良好な結果であった |
| ②B図形 | 大変良好な結果であった |
| ③C測定 | 良好な結果であった |
| ④C変化と関係 | 大変良好な結果であった |
| ⑤Dデータの活用 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-----------|
| ①選択式 | 良好な結果であった |
| ②短答式 | 良好な結果であった |
| ③記述式 | 良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

記述式の問題『二 3・二 4』の正答率が全国平均と比較して、数値的には低くはないが、選択式に比べると低い。

分析

①全体的に無回答率は低く、正答率も比較的に大阪府や全国に比べ高い。

成果：全体的に、全国平均の正答率を上回っており、良好な結果であった。設問一と設問二の正答率が高いことから、学習内容が授業での反復練習による取組みで、習得できており、具体物を使用しながら低学年のころから学習を進めることができていると考える。

②問題文が複雑になると、正答率が少し下がる傾向がある。

課題：設問三では正答率が少し下がり、無回答率が少し上がることから、問題文が複雑になると、あきらめてしまう児童が増えていると考える。問題文を正確に解釈ができるように、算数でも『読む』力の育成が必要である。

③言葉で説明する問題の正答率が少し下がり、無回答率も他と比べ少し高い傾向がある。

課題：設問四 3 正答率が少し低くて、無回答率も他と比べて少し高いことから理由を説明することに抵抗がある児童が多いと考えられる。普段の授業から思いや考えを言葉などで表す活動を取り入れる必要がある。

〇●経年比較●〇

全体的な傾向についての分析

正答率は、全国平均に比べ少し高く、どの分野も概ね良好という結果が過去十年継続している。毎年上下はあるが、全国平均に比べて少し高い水準で推移している。

無回答率は、全国平均に比べ低く推移している。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層 についての分析

エンパワー層は過去三年全国平均に比べ低く推移しており、学力低位層の増加は見られない。

学力高位層と低位層の差は、今年度は詰まっており、差が縮まっている。ただ低位層が上昇し、高位層が下降しているため、全体的な底上げが必要である。

〇●取組み●〇

学力向上に関する取組み

①授業で自分の意見や考えを記述する機会を意図的に増やす。

問題文から要旨を読み取り、自分で要約する力に課題が見られたことから、各授業で自分の考えを書いたり、表現したりする時間を確保し、言葉で説明したり、自分の考えを記述したりする経験を多く積ませていく。その際に、記述を書くことが苦手な児童が書くことができるように、机間巡視の際に児童一人ひとりのノートを確認し、書けるよう時間配分を調整したり、助言したりするなど手立てを考えていく。

②力試しプリントを実施し、初めて読む文章をもとに問題を解くという経験を積ませる。

国語も算数も共通して、問題文が複雑になると、正答率が少し下がる傾向があるので、小学生力試しプリントを学期ごとに実施(4～6年)する。問題形式に慣れさせ、初めて見た文章に対して問題を解く抵抗感を少なくしていく。

③『読む』力について各学年の到達目標を明確にし、系統立てて育成する。

『読む』力について各学年の到達目標を明確にしたうえで、授業を実施する。目標に到達できたかどうかを判断する手段の一つとして、『ことばのちからプリント』を活用し、児童の『読む』力の育成を図る。

④無回答率を低下させるために、普段の学習プリント、テストの際の声掛けや学級の雰囲気を意識する。

日頃から授業において、自分の考えが持てるように、児童に対してヒントカードを作成したり、間違えても大丈夫という雰囲気を大切にしたりするなど年間を通して意識していく。また、1～5年生までに行った学習プリント、テストまたは取組みの際の声掛けも大切にしていく。